

ネパールからの留学生たち その2

特定非営利活動法人ミランクラブジャパン
理事長 マナダール マダープ ナラエン

留学生たちは日本での生活や立ち寄った見知らぬ土地の話をして友人たちを驚かせた。

日本での滞在先は学校近くの本郷、浅草と渋谷村で、三か所に分宿した。本郷では家二軒を月30円で借り、留学生4名、付き人10名で、浅草では家一軒を月20円で借り、留学生3名、付き人5名で、農業を勉強した学生1名が住んだ渋谷村は家一軒月10円で付き人2名が滞在した。このように沢山の付き人に世話されている学生たちを見て、滞在先の大家さんからはプリンス・スチューデントと呼ばれていた記録が残っている。

留学生たちは殆ど外食をしないので世話役である付き人が食事の用意をする。これは食文化の違いだけでなく、カースト制度から来るもので、文化・習慣の違う外国での食事は食べることができなかったからである。

しかし保護者であるスワミ・ブランダ・ギリは、それを無視して鶏肉を食べ、(本来食べてはいけないブラフマン族)日本人が作った食事を口にし、学生たちにも勧めた。ギリは“船に乗った日からカーストはなくなったのだ”と言い、日本では酒なども飲み、体調を崩している。

当時のネパールではヒンドゥー教からくるカースト制度や厳しい規律があったため、特に食事に関しては厳しく守られていた。1965年の憲法改革で、“国民は皆、平等である”と記されたが、今でも特に地方では、地域にもよるがカースト制度が色濃く残っていて、差別を生んでいる。

留学生たちは、帰国後日本で学んだ専門知識を生かし、高い地位に就いた者もいた。そして彼らは自身が得た知識や技術だけではなく、木や花の種を持ち帰り、貴族の庭に植え育てたのである。それは柿(Haluwabad)、栗(Thulo-kattus)、藤花(Godavari-phool)、菊花(Nil-lahar)で

ある。それらはネパールの地に根付いた。

日本に留学した学生はラナ族やその親戚関係、側近の子供たちで、年齢も18歳から27歳までだった。留学先は東京大学(旧帝国大学)、東京工業大学(旧蔵前高等工業学校)そして東京農業大学(旧農家大学)だった。

留学先を日本とした理由としては、当時鎖国であったネパールと同じく日本は鎖国を経験していること、王制(天皇制)であること、仏教国であることがあった。隣国インドは英国の植民地となっており、ラナ政権はそのことに対する恐れがあった。

留学生たちは日ネ両国で河口慧海と親交があったようだ。4回訪れたネパール、ネパールからのチベット行きでネパール政府の世話になった慧海は日本から留学生たちの様子をネパールへ報告している。

留学生は以下の者たちである。

ジャンガ・ナルシン・ラナ(22歳)
バクタ・バハドゥル・バスニヤト(19歳)
ヘム・バハドゥル・ラジバンダリ(22歳)
バラ・ナルシン・ライマジ(20歳)
ディーブ・ナルシン・ラナ(18歳)
ルドゥラ・ラル・シン(27歳)
ピチャル・マン・シン(25歳)
デヴ・ナルシン・ラナ(20歳)

当時の日本にはネパールの領事館がなく、留学手続、日本滞在中の緊急連絡先は横浜にある在日英国領事館に依頼した。

留学生たちは1905年9月に帰国、政府は彼らを様々な部署に配属した。彼らの功績は今でも残されている。彼らは留学後もの見方が大きく変化したようである。

残念ながら デヴ・ナルシン・ラナ(20歳)だけは病のため早めに帰国し、活躍することなく亡くなった。

次号で留学生たちのその後を追う。